

針葉樹會報

通卷第八十六號



赤石岳 惡澤岳

ベン 公

八月十九日、重くも無いリュックを大げさにかついで、蒸暑い小雨をついて下宿を出た。萩窪の驛員は「又か」と云ふ顔をして定期券も見ずに薄汚ない服の破れを覗いて居る。シーズンも終りに近いので列車には上高地行らしい男子の一行と、数人のガール以外登山客は見當らない。我々の一行はネコさん（岩崎）とゴムさん（宮城）とベン公（船本）。

伊那大島より落合迄バス。山日記には、第一日大河原泊とされて居るが、極く最近通じた此のバスの恩恵で、我々は十一時に大河原を突破して居た。静かな小湫湯の宿で、かはい、姉さんにお茶をたて、もらひ、徒渉で有名な小湫川の廻行にさりかゝる。丁度減水して居る時であり、それに最近土地の小學生が百名餘り登山したさかで、指導標があつて道條が明瞭なのに助かつた。それでも棧道が途中で落ちて居ては引返して徒渉するなど、大分惱まされた。此處は増水したら何うにもならぬ所だ。

昔、関山さんが此處を廻行した時は十三回徒渉した記録があり、又丸茂さんの時は人夫が流されて、ふんだんに持つて來たキヤラメルが水浸しになり、遂に登山せずに引返へしたさうだ。我々は徒渉らしい徒渉は一回で済んだが、之も非常時をよく辨へてキヤラメル等持つて來なかつたせいだらう。

小雨に濡れたシャツを乾かしながら、廣河原小舎の小舎帳を見ると、一夏の泊客が五十人に過ぎない。「全く困りました。此間小學生が百人泊つたが、あれは金にならぬし」と番人がこぼして居る。同情もしたが我々には如何にも仕様がなない。

翌朝、廣河原を發つ時には雨が降つて居た。登り道で荒川小舎の番人に遇ふ。「どうも天候が崩れて來て、川が増水するといけないし、客も無いから荷物を下げに小湫湯へ下る」と云ふ。ゴムは例の氣壓論をしきりに論じて居たが、大聖寺平

へ着く頃には雨も全く上り、蒼穹の下、三人は遠く伊那の盆地を瞰下して居た。赤石へ登つて荒川小舎に泊る。此處でも小舎帳を繰つて見たら、最近黒田正夫氏夫妻が泊つて居る。

夜には明るい月が出た。何時も高い富士の上空には火星が獵奇的な光を投げ、カシオペアの左には木星が冷たく光つて居る。静かな夜だ。残りの焚火にかけて置いたコーヒーもいつしか香よく薫じて居た。

第三日。ガスの被つてゐる荒川、惡澤岳を越へて、西俣の櫻島へ下る。雨こそ降らぬが何處の頂上へ出ても眺望がきかず、鞍部へ下ると谷のみ見える仕末。櫻島井川紙料會社の飯場で晝食をさつて二軒小屋へ下る。

如何したこゝか今回は皆食慾がなく、一升炊けば三人で一日食へる。或は糖分の缺乏と云ひ、或は蛋白の缺乏と云ふ。宿のお内儀は「山に酔つた爲だ」と斷定したが、恐らく赤石と云ふ山は空氣中にカロリーが漂つて居るのだらう。

第四日。傳付峠より赤石、聖、塩見に訣別して矢の如く峠を下る。トロとバスに半日揺られた後、甲府の丸茂社長を訪れる。さうだ御馳走になつたが大酒家ぞろひの爲、遺憾ながら例の國寶的踊りなど誰も演じなかつた。

—終—

穂 高 だ よ り

小 谷 部 生

残暑中仲々御苦勞の事とお察しします。其後當地も愈々秋らしく、昨今はめつきり冷えて、まるで十月の氣候です。遊覽客も急に減つて、昔の靜寂境を想はせます。病氣靜養の爲に來たのです

が、河童橋からの例の景色を見ては、我慢も何も出來ず、もと／＼大した事もなかつた體なので、大いに張切つて了ひました。別紙記録の通り登る程にコンディション良く、結局小生の病氣は登らざる爲に起つたものらしいです。今度こそトレイニングを怠らず、冬には大いに頑張度いと思つて居ります。何れ當地引あげの際は東京へも寄つて歸りますから、又お會ひ出來る事でせう。珍談をお聞かせしませう。では東京の皆様宜敷御傳聲願上ます。

八月三十日

上高地にて

草々

小谷部拜(望月宛)

○燒岳 八、一一 晴雲霧多し

上高地(一、〇〇)——燒岳小舎(三、三〇)頂上往復。十三日迄同小舎に滞在し、番頭然とハッピを着込んで客へサービス。すつかり山の衆に見られ、面白い經驗をした。

○涸澤小舎生活 八、一八—二三

新設の小舎も出來上り、風呂も完成したと言ふので出掛ける。北穂高澤出合右岸の岩壁直下で、いつも瀧のある場所である。雪崩も、前穂からのアフリさへ無ければ、先づ大丈夫らしい。キンシヤウヤ平林親子が番人となつて、新雪の來る迄頑張る相だ。丁度自分が登つた時に風呂が出來て、涸澤の處女湯へ浸る事が出來た。北尾根、奥穂を眺め乍ら風呂に這入る等、ぜいたくの沙汰である。收容人員三十名位の、思つたより小さい小舎だ。これで來年から涸澤も、愈々園地化される事だらう。

○奥穂高岳 八、二一 雨後晴

涸澤小舎發(一、一〇)―穂高小舎(二、三〇)―奥穂頂上(三、一五―三五)―穂高小舎(四、〇五―三〇)―小舎歸着(五、一五)頂上迄下駄穿きなりき。穂高小舎の重さんも、今シーズンの超景氣で満足らしい。

○北穂高岳 八、二二 晴後夕立

涸澤小舎發(七、〇〇)―涸澤コル(九、〇〇)―瀧谷Dルンゼを稍降り又引返す―北穂頂上(一一、〇〇)―北穂高澤―小舎(二、五〇)

昨夜久し振りでオミキが上つたと言ふので、金正屋やガイド連さ大いにきこしめして宿酔の氣味あり、どうも重心がされず瀧谷へ這入つても闊志湧かずに引上げて了つた。北穂の上では素的な眺望に恵まる。長く晝寝してふらふら降つた。小舎に着くと間もなく、物凄しい雷と豪雨あり、快適の極みだった。

○西穂高岳 八、二九 快晴

上高地(七、〇〇)―西穂高澤下(九、〇〇)―主稜(一一、五〇)―頂上往復―主稜(一、三〇)―西穂高澤下(三、〇〇)―上高地(四、二〇)

前略 其後東京の暑さは如何。小生又涸澤へ参りし故、左記通り宜敷會報へ御追加頼みます。(後略)。

九月五日

上高地、西糸屋内

小谷部全助(望月宛)

○前穂高北尾根行(同行他二名)九、二 薄曇

上高地發(一一、〇〇)―涸澤小舎(三、五〇)

九、三晴一時曇 涸澤小舎發(八、三〇)―三、四コル(一〇、二〇)―前穂頂上(一二、三〇)―二、三〇)―奥穂との最低コルより降る―小舎歸着(四、〇〇) 九、四 小舎―上高地

―(以上)―

御 岳 詣 り

K A N P

六月頃の豫定では笠谷から笠へ、或は穴毛谷溯行等を考へてゐたが、七月一杯は家に急病人があつたりして、さても山どころの騒ぎではなくなつたのであるが、なんさかその方もケリが附いたので、クマ、ペン兩先輩の驥尾に附して、王瀧川溯行木曾御岳行の計畫に参加することゝなつた。

八月四日 颪風の豫報があつたが、出掛ければどうにかなると思つて、十時四十五分新宿發に乗る。驛頭には天幕、シユラフザツク、ザイル等を心配してくれた日江井、宮城の兩君と、クマさんの部下なるE嬢が見送りに來らる。何時も乍らの現役諸君の御厚意には感謝しなければならぬ。それから例によつて羊羹を下さつたE嬢に對しても。

五日 豫め同行を約してゐた有明の下川は來られなくて、代りの高山一郎なる人夫とは塩尻で落合ふ。朝の美しい光線をあびた信濃の山々を見ながら、八時過上松に着く。クマさんが、マゴさんの手を経て帝室林野局のえらい人から紹介を得てゐたので、林鐵へは簡単に乗せてもらへた。王瀧川沿ひに奥へへ進む。十時田島着。林野局三浦出張所に休ませて戴き種々山の様子をうか

だふ。クマさんの紹介状が物を云つて中々待遇のいいことは嬉しい。晝食をとつて〇時十分再び林鐵に乗車。シベリヤ鐵道に見る様な、車體の割に煙突の大きな汽車。この無蓋の貨車にリュックに寄りかゝつて乗つてゐる氣持は又良きものである。赤い膚の御岳が時々見える。氷ヶ瀬の深潭、長いトンネル二つ、等々で瀧越一ノ瀬を過ぎ、三浦へ着く。こゝは日本發送電の大貯水池の出来る處で、その工事は今後何年位かゝるか知れないが、中々大がゝりなものであつた。この奥で今迄の汽關車がガソリンカーに替る。雨が来る。程良く濡れた頃王瀧川右岸、小坂谷出合の本谷伐木所に到着。此處に一晚御厄介になる。こゝでも万事厚遇された。

六日 細い雨が降つてゐる。九時近く出發。今日からいよいよ二本の足で歩くこゝなる。伐木所の人が一人道案内に来てくれる。始め軌道沿ひに左岸をゆき、程なく右岸に渡る。少しゆくと軌道は終り、今迄至極平凡だつた王瀧川もそろ／＼大河の根強い源流の相を呈してくる。約一時間半で路がいよいよ右岸の尾根へ登るやうになつて、川と分れる處に來た。豫定は何處迄も忠實に川を溯るに在つたが、この雨では仕方がない。道案内に勧められるまゝ尾根の路をさる。十一時過、稜上に出て雨の中で食事。道案内と別れた。之からこのだゞつ廣い尾根（彦七平と云はれる）を東に進む。笹が蔓つて上からの雨と、下からの雨とで全身がグツシヨリ。石ナンス澤の天幕地へは二時過につく。ペンチヤンの所謂「お早いお著き」である。高山が得意の腕を發揮して猛烈な焚火をおこす。古い小舎の跡で焚木はフンダンにあるから便利である。夜の九時過迄豪勢な巨火を燃やし續けたのだから、その盛ん

なることは御推察願ひ度い。

雨の中の幕營ではあつたが、中々快適な一夜であつた。

七日 昨夜一寸星がキラメいたが、今日も又少雨。ゆつくりテントを畳み晝食をたべて、〇時四十五分天幕地をあさにし尾根道を登る。王瀧川溯行を主張した二先輩も遂に惡天候の爲初志を翻へした。登る程に天氣は良くなつてきて御岳の山肌が見える。繼母岳は殊に立派だ。四時半頃遂に二ノ池の西方に到り、人氣の少い洵に恰好なキャンプ・サイトを見附て幕營。雲はどん／＼飛び青空はみる／＼擴つていく。緑の褥に寝ころび紺青の空を見つめて、「紫の雲ゆらめけば」を歌ふ。高山が小舎から水筒に酒を買つて來る。皆すつかりいゝ氣持になつて、折柄やつてきた猛烈な夕立も氣にかけず、天幕の中で高鳴。目を覺した時は外には美しい月光がさしてゐる。

夜中ペンチヤンと小便に起きてみるさ、山々は静まりかへつて空には久々の星屑が明日の晴天を約束してきらめいてゐた。

八日 靜かに美しく晴れた朝。だが御來光には晚かつた。五時過山頂へ向ふ。頂上の白い衣の群衆には全く辟易した。之が三千米の山頂とはどうしても思へない。槍、穂高、木曾駒、遙かに富士、それから白山等々の青い山波を厭る程眺めて早々に切り上げる。天幕に戻つて朝食後、撤收して摩利支天へ向ふ。早くも又霧が包みはじめた。五ノ池近くの飛驒頂上を通り、一路岳ノ湯へ下る。途中で又大粒の雨にやられ、ペンちゃん二人して雷に驚き乍ら岳ノ湯に馳け込む。今日は樺谷へ下つて幕營の心算が、濡れ嵐となつては有無を云はさず、旅舎に上つて湯に飛び込んだ了

ふ。これで澤下りの豫定も無くなり、明日は普通の路を下ることゝなつた。ザイルは結局ペンちゃんが担いで登り、小生の肩に乗て下る。

九日 クネ／＼した長い道を小坂へ。樺谷伐木會所の所長さんにあらく丁寧を迎へられ、道が壊れて運轉してゐない林鐵を特に出してゐたゞいて便乗。質朴な飛驒の山村を縫つていよ／＼山もお別れさなる。この邊の溪谷は恐しい迄に美しく、深淵、飛瀑滑さ展開する。落合で乗替へ、無事に小坂へ著く。林野局の小坂出張所へ寄つて丁寧にお禮を述べ、ビールの杯をあげて午後四時四十七分の高山線で南へ向ふ。乗り合はした御岳歸への白い着物の御連中の騒ぎには、憎惡をもよほす迄に不愉快さを感じたが窓外を流れる益田川の流域は又棄て難い溪谷美に富んでゐた。

(一九三九、八)

會員通信

○堀岡清君より(九月廿七日附 編者宛)

先週の末に門司を出て、本月中の休暇で、豫定通り開門岳、櫻島、霧島縦走と全部済ませました。何れも山としては、女子供でも登れるものですが、前二者の如き海からツツ立つてゐる獨立の山ですから、又變つた味があります。霧島の縦走途中で、中岳から高千穂岳を見た所は、太郎平から見た薬師に非常に似てゐるので、懐しく思ひました。高千穂へは近チャンも登つてゐるそうですが、韓國岳との間の尾根歩きは悪くありません。

(霧島温泉にて)

山岳部報告 (七月—九月)

記録

(1) 涸澤合宿(七、一四—七、二〇)

先發隊(宮城 山田 佐藤 根本)七日出發。八日上高地德澤間荷上。九日涸澤入。十日德澤往復。十一—二日滞在。

後發隊(大塚 日江井 深谷 久保 佐藤(眞) 高野 松下 鈴木 清水)十日出發。十二日涸澤入。

十三日 全員奥穂詣り。山田は天幕番。午後一般班に随つた岩崎入幕 俄然賑やかさなる。

十四日 本日より合宿開始。六峯狸岩へ、夫々パーティーを編成して登る。

十五日 (晴)

1. 北穂高側稜(岩崎 佐藤 宮城 深谷)

2. 奥穂ジヤングルム(大塚 鈴木 清水 佐藤眞)

3. 本谷より北穂高(日江井 高野 松下)

4. ジヤングルム 飛驒尾根(山田 久保 根本)

十六日 (晴) 佐藤(眞) 休養

1. 北尾根(大塚 深谷 根本) (宮城 久保)

2. 北穂高側稜(日江井 鈴木 清水)

3. 奥穂ジヤングルム(岩崎 高野 松下)

4. 涸澤槍(山田 佐藤)

十七日 (晴) 休養、ほつと一息。見上げる青空に雪のコントラストが強い。

十八日 (晴)

1. 北尾根 (日江井 鈴木 深谷) (山田 高野 松下 清水)

2. 北尾根三峯フェイス (大塚 佐藤)

3. 北穂高側稜 (久保 根本 佐藤眞)

4. 本谷より南岳、北穂高 (岩崎 宮城)

十九日 (晴) 第四日目、いよいよ最終日。皆張切つて散つて行く。岩崎天幕番。

1. 瀧谷第二尾根 (日江井 宮城 根本)

2. 瀧谷第四尾根 (山田 久保 佐藤)

3. 奥又白經由前穂高 (大塚 深谷 佐藤眞) 高野 松下

鈴木 清水)

二十日 (晴) 合宿解散。思ひ思ひのプランを樹て、この池の平から消えるもの十二人。大塚、根本に見送られつゝ一先づ上高地へ。

(2) 燕槍縦走 (七、九一七、一二) 岩崎他五名

学校の一般募集であつたが、相不變天氣が悪い。

(3) 尾瀬沼 (七、一一一七、一五) 檜淵其の他

(4) 瀧谷第四尾根 (七、二二) 大塚 根本

(5) 笠岳より三俣蓮華を経て有峯、大多和峠越え

(七、二二一七、二七) 岩崎 日江井

(6) 錫杖、笠より鳥帽子へ (七、二二一七、二六) 山田 佐藤

(7) 大瀧山 (七、二二) 久保 高野 鈴木 清水

(8) 槍烏帽子縦走 (七、二四一七、二六) 大塚 根本 清水 高野
鈴木。高野、鈴木は天上澤經由歸京。

(9) 尾瀬沼 (七、二五一三〇) 檜淵

(10) 鋸、駒ヶ岳 (八、一二一八、一四) 久保

(11) 増富生活 (八、一五一八、三二) 久保

二十二日瑞牆山へ登る。

(12) 鳳凰山 (八、一七一八、二〇) 鈴木他一名

(13) 清津峽 (八、二一一八、二四) 鈴木他一名

(14) 大樺小舎生活 (九、三一九、一〇) 大塚 山田 根本 高野

北岳バットレス第一、第三、第四尾根登攀に成功す。

(15) 志賀高原 (九、七一九、一〇) 原

部 誌

○夏山報告會 (九、一五) 於本科

○豫科懇談會 (九、二七) 於豫科

豫科部長西川教授、神保教授、体操科の先生一名をお招きして色々山の話をする。本科からも四名出席した。

記 録

○入川より川苔山 望月達夫

八月廿七日 (日) 晴

御岳—古里附 (九、一五)—魚止瀧 (一〇、二〇)—廣河原、晝食 (一一、〇〇—四〇)—布瀧澤出合 (〇、五五)—外道瀧 (一、五〇)—姥岩澤出合 (二、〇〇—五〇)—早瀧往復—姥岩澤右岸造林小舎 (三、一五—三〇)—川苔山 (四、四五—五、〇〇)—大タマ (六、四〇)—

棚澤(七、〇〇)

會社の連中を十數名連れて行つた爲、案外時間を要して了つた。入川は丁度海澤級で、奥多摩の名所の中では一寸良い澤歩きが楽しめる。海澤程まとまつた感じにさばしいが、變化に富んでゐる。早瀬は中々大きな素晴らしい瀧だ。晩秋にでも一人歩きしたらいい處であらう。

○月山・鳥海山 増山清太郎

九月六日 山形―間澤―湯殿山―月山頂上

七日 月山―羽黒山―鶴岡

八日 鶴岡―象潟―小瀧

九日 小瀧―鳥海山―矢島

月山は一口にいへば、だだつ廣くてつまらない山である。山すれのした人間には、芭蕉のやうな感激は得られない。ただし相當の深山で、頂上から六十里越方面へ掛けて、黒々さ茂つた深林は、木曾御岳の飛騨側を彷彿たらしめる。湯殿山、羽黒山を合せて出羽三山と呼ぶから、山が三つあるのだらうと思つたら、山は月山一つきりで、その兩端を羽黒山、湯殿山と呼ぶのであつた。鳥海山は、これまた道程許り長くて、つまらぬ山である。早曉三時に小瀧の村を出て、有明の月に照され乍ら、馬に揺られて行つた氣持はなかく良かつたが、馬を降りて登りに掛つたら、暑いのに閉口し、下りに掛つたら、道の悪いのさ長いのに驚いた。頂上から矢島の町まで、十時間以上掛つたのだから相當なものである。北側は流石に雪が多く、標高千三百米あたりまで、可成の雪田がある。兎に角、兩方とも、夏登る山でな

い。

○箱根金時山 吉澤一郎

九月九日、課の懇親會で箱根へ行き、仙石原の仙郷樓へ泊つた。他の者は呑むのが目的だから、十一時頃まで騒いでゐたが、私はお酒もビールも大嫌ひ、いゝ加減でドンぐれてしまつた。九月十日、午前五時十五分、宿の者も起きてゐない。私は浴衣で草履さいふいでだちで金時山へ登つて来る。頂上へ著いたが深い霧で何も見えぬ。歸りは雨にたゝかれ、草履はきれる、宛でレンペンそつくり。然し普通四時間、健脚三時間さいふ所を休憩を入れて二時間で往復。宿の者は何と云つても信用しなかつた。戻つてから暫らくして皆も起き出して來た、寢てゐる内に一山稼いで來た譯だ。

○赤久繩山 望月達夫

九月二十四日(日)晴

高崎⇨下仁田(七、二〇)―青倉―土谷澤(九、一〇)―杖植峠(〇、一五―一、〇〇)―赤久繩山(二、〇五―二、四五)―鹽澤峠手前ノ鞍部(三、三五)―會場(五、〇〇)―梅ノ木平(五、五五―六、四五)⇨(ハイヤー)⇨上州福島(七、二五―七、四五)⇨高崎

秋晴れの一日を、西上州の赤久繩山に過しました。素晴らしい眺望に恵まれ、北は淺間、荒船、上毛三山から日光、武尊、南は奥秩父の大屏風と神流川沿ひの形面白き岩峯等々。尾根の薄の穂越しに見る秋の山々は、又捨て難い趣きがありました。

消 息

奥野 綱重君 札幌市南九條西十二丁目七八七へ轉居。

村尾 金二君 (勤務先變更) 石油共販株式會社。電話(丸内一五七一六)。

七一一六。

黒田 正治君 (應召) 九月十五日入隊。(通信先) 水戸歩兵第二聯隊第一中隊第一班。(留守宅) 千葉市本町二丁目一七二。

小柳 二郎君 大森區北千束町四七六へ轉居。

新羅 二郎君 (戰地の通信先) 中支派遣軍齋藤(彌)部隊佐々木隊次田隊。

岩崎 利一君 東京府下國立大學町國立中央莊に當分起居。

關西針葉樹會

(1) 堀岡氏を迎ふ 四月八日 岡田、中島、黒田

荒氏見ゆとの信號に集るもの三人。淀屋橋の竹葉亭で晝飯を共にした。最近益々磨きを加へて來た彼氏、大陸關係で多忙らしく、門司の物産は彼氏なくては動かぬらしい。用向は公用ではないらしいが、極力否定してゐた所を見ると、〇〇の爲めでもないさうだ。大陸の話やスキーや山の話等してから、春風の淀川べりを散歩して別れた。

(2) 中川氏を迎ふ 四月十八日 於南きくのや

(出席者) 中川、五十嵐、森、岡田、中島、黒田

孫さんが見えてゐるさといふし、五十嵐さんが又大阪へ戻られたといふので、ソレツと許りに集つた。例に依つて中川議長を中心に、統制の話、石炭の話、家庭風呂無用論、子供の話、東京方の消息、春山の相談等一くさりやつてから、孫さんの神経痛論一席拜聴。口も手も自由自在、スキーよし山よし、酒でも何

でもござれといふ現在の孫さんを見るさ不思議でならない。尤も舌迄神経痛になつたら大變だ。盛會裡に解散。

(3) 近藤氏を迎ふ。六月廿三日 於安土町魚安

(出席者) 近藤、五十嵐、高木、森、中島、岡田、小谷部、

黒田

コンちゃんやんが東京の歸途立寄り、高木さんが二年振りで元氣な姿を見せるし、小谷部も病後? でデッブリと太つて現はれ、近來にない盛會となつた。劈頭コンちゃんの大牟田の爆撃があつてから、當店自慢? の天ぷらで飲む程にすつかり話が弾み、やがてコンちゃんから一人々々手相を觀て貰つたが、皆遅かれ早かれ溜る上安心立命を得るさといふので御氣嫌となつた。無料なのでどうかと思つたが、掌を睨むあの眼光の鋭さはうそ偽さとは思へない。かくて西へ向ふコンちゃんを大阪驛に見送り閉會。

(黒田記)

黒田正治君應召歡送會 九月十三日(水) 於如水會館

(出席者) 吉澤 村尾 増山 黒田 小柳 林 望月 佐々木

突然黒田君應召の知らせをうけ、通知が間に合はず少數の參會者のみで、黒田君には申譯なかつた。一同の署名した日の丸旗を贈る。尙今夜の集りには小柳君に非常にお世話になつた。

針葉樹會例會 十月三日(火) 於如水會館

出席者(會員) 中川 吉澤 村尾 金田 増山 丸茂 小柳 望月 佐々木(部員) 岩崎 船本 大塚

丸茂さん御土産の甲州葡萄酒に味鼓を打つ。新刊の「針葉樹第十號」を配布。出席會員の少なかつたのは残念であつた。